

教員の成長を支援するティーチング・ポートフォリオ作成の試み

川 野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2013年11月1日受付、2013年12月19日受理）

要 旨

現在、大学教員の採用や人事に関する評価が、教員自身の研究業績を中心にしたものになっている。しかしながら、一方では教員評価については、教育に関わる教員自身の評価を加えるべきであるとの意見がある。今後は、教員評価が教育に関する業績評価の視点に軸足が移っていくのではないだろうか。その理由の一つに大学を取り巻く社会環境の変化と、大学に入学する学生の多様化に関心が持たれるようになってきたからである。そこで、ティーチング・ポートフォリオのワークショップに参加したことを契機に、自らのティーチング・ポートフォリオ作成についてまとめてみることにした。

1. はじめに

最近、ティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略記）という文言を目にしたり、耳にすることがある。FD研修会においても、TPについての講演を聞くことがある。そしてTPに関心を持つ教員が徐々に増えはじめていることも事実である。海外において、TPを初めて紹介した人はピーター・セルディンであった。最初にTPを紹介した初版本が、平成2（1991）年に発行されており、当時はアメリカとカナダの一部の地域に限られていた。しかしその後、ピーター・セルディンの本は、各国で翻訳されて多くの大学で活用されている⁽¹⁾。このように、海外におけるTPは20年以上の実績をもっているが、日本においてTPが注目されるようになった契機は、中央教育課程審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008）が提出されたことによるものであった⁽²⁾。答申の第3章「学士課程教育の充実を支える学内の教職員の職能開発」の【大学に期待される取組】の箇所、TPの導入・活用に関して次のように述べられている。

「教員の人事・採用に当たっての業績評価について、研究面に偏することなく、教育面を一層重視する。大学として、自学の教員に求める役割・責務、専門性等を学内外に明らかにする。評価に際しては、教員の自己評価を取り入れる（教員は、学生による授業評価の結果を自らの評価に反映させる）。評価の対象として、例えば、①優れた教科書や教材の作成についても積極的に位置付ける。②FDに関する積極的な取組についても、適切と認める場合は評価の対象とする。さらに、③授業改善に向けた様々な努力や成果を適切に評価する観点から、教員が教育業績の記録を整理・活用する仕組み（いわゆるティーチング・ポートフォリオ）

の導入・活用を積極的に検討する。④教員の役割の機能分化（教育・研究・社会貢献など）に対応した教員評価の工夫について研究する。⑤大学院修了者を教員として採用する際、審査に当たって、TAとしての教育実績を適切に評価する。」と。

また栗田（2009）は、TPを「教員が、自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、様々な根拠資料によって、これらの記述を裏付けた教育業績についての厳選された記録」と説明している。さらにピーター・セルディンは、TPを「ティーチング・ポートフォリオとは教育業績を記録する資料の集合体であり、1人の大学教員の教育活動について最も重要な成果の情報をまとめたものである。」と述べている⁽³⁾。日本では数年前から栗田らの研究を契機として大学教員の間で教育業績評価についての関心が高まってきている。

現在、大学教員の採用や人事に関する評価が、教員自身の研究業績を中心にしたものになっている。しかしながら、一方では教員評価については、教育に関わる教員自身の評価を加えるべきであるとの意見があることも事実である。今後は、教員評価が教育に関する業績評価の視点に軸足が移っていくのではないだろうか。その理由の一つに大学を取り巻く社会環境の変化と、大学に入学する学生の多様化に関心が持たれるようになってきたからである。

2. 研究の目的

筆者は、数年前にピーター・セルディンの翻訳書を読んだとき、現在は大学教員の評価が専門性に関する研究業績が中心になっており、学生の指導や教育に関わる実績はあまり大学教員としての評価に加味されていないという思いを抱いていた。大学教員の評価は研究業績の方にシフトしており、教育業績についてはほとんど評価がなされていない現状を思うに付け、セルディンが提示した教育業績評価は今後大学でも重視されてくるだろうという期待感を抱いていた。またいずれ文部科学省からは研究業績評価ばかりではなく、教育業績評価の方も求められる時期がくるのではないかという予感がしていた。今回、教育業績評価に関わるワークショップに参加したことで、教育業績評価に対する関心が一段と強くなり、その内容を実践研究としてまとめてみようと思い立つとともに、その教育業績評価内容を、実際の授業の中で学生に提示して学生の反応を見てみようとも考えた。

一方、本学のFD研修会でもTPに関する講演会やワークショップ（以下、WSと略記）が行われており、教職員のTPについての関心がにわかに高まっている。そうしたなか、佐賀大学で2泊3日のTPWSに参加する機会があった。実際に自己の教育業績の記録を作成していく際には、スーパー・バイザーやメンターの指導を受けながらTPを書いていくことができた。TP作成の過程を通し改めてその重要性和必要性が理解できたので、本稿でTPについてまとめることにしたのである。

3. ティーチング・ポートフォリオのワークショップ (TPWS) の内容

(1) ティーチング・ポートフォリオ (TP) とは何か

平成20(2008)年12月の中央教育審議会答申でTPが登場して以来、大学におけるTPの認知度が高まってきた。大学評価・学位授与機構は、TPやそのWSに関するそれまでの取り組みとして、「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題」の膨大な報告書⁽⁴⁾をまとめている。これは、「評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書」である。この報告書ではTPとは、「自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様なエビデンスによってこれらの記述を裏づけた教育業績についての厳選された記録であり、自律的な教育改善を促す仕組みを有しかつ多角的な教育評価ツールとしての可能性もあわせ持つ。」と説明している。また外国で1990年代に始まったTPは、教員の業績評価や採用や昇進などの資料として活用されることが多かった⁽⁵⁾。TPの作成目的は、教育指導のための振り返り、授業を行う際の自らの教育理念や教育方法を確認する意味合いが強いと思われるが、一方では大学人としての業績評価として活用されていたことも現実である。そういう意味ではTPを作成する場合、それは何のために誰に向かって書くのかという視点が重要になってくる。自らの業績評価や教員採用などのために作成するのであれば、TPの読み手は大学の執行部役員向けのものになるであろう。TPが自らの授業を分かりやすく行うため、教育実践を研究するためであるなら、読み手は学生になってくる。TPを作成する内容も学生向きに分かりやすく書く必要がある。日本ではTPの取り組みが始まったばかりであるし、TPが教育活動を振り返るものであるから、日本におけるTP作成を開発していくことが必要になってくる。大阪府立大学高専TP研究会は、自己省察を重視するとともに、自身の教育研究を表出する視点からTP作成に取り組んでいる⁽⁶⁾。

(2) ティーチング・ポートフォリオのワークショップ日程

佐賀大学主催のTPWSは、福岡市内のホテルで、8月21日～23日の2泊3日にわたって開催された。その日程は下の表1に示した通りである。

表1 TPWSの日程

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
21						昼食+ アイスブ レイキン グ・オリ エンテー ション	第1回メンタ リング		TP作成		夕食と情報 交流会		TP作成			第1夜/切 23:00 メンバーと相 談
22			第2回メンタ リング	TP 作成	昼食		TP作成		第3回メンタ リング		夕食より よいメン ターになる ために		TP作成			第2夜/切 16:30 メンバーと相 談
23		TP作 成・TP 発表準備	TP発表・WSの 振り返り 終了式													第3夜/切 8:00 メンバーと相 談

(3) ティーチング・ポートフォリオ作成の実際

TPWSに参加するにあたり、課題書籍を読んでおくこと、スタートアップシート（TP作成に関わる内容）を作成することが事前課題として与えられていた。ティーチング・ポートフォリオ作成では、メンターからのアドバイスを受けながら自らのTP作成をしていった。なお、メンターからの指摘と支援は、次のように箇条書きでまとめることができた。

第1回メンタリング（2013年8月21日：13：30～14：25）

- ・自分の理念を書く。
- ・理念が教師像であれば、具体的なことを書く。
- ・こういう先生になって欲しい。
- ・教育の責任では、教育に関する責任を入れる。教師像の分も。
- ・読み手が誰かによって書き方が変わる。大学の幹部か、学生か。
- ・学生であれば、読み手が分かりやすいように書かないと読まない。
- ・授業での講義がダメならば、そのダメと思っている理由を書く。
- ・学生にどういう先生になって欲しいのか。
- ・理念や責任を達成するために、どうするかを書く。
- ・どういう学生を育てたいのか。
- ・そうした学生を育てるためにケースを使っているが、ケースを使っている理由を述べる。
- ・理念は学生が見て（読んで）分かることを書く。

第2回メンタリング（2013年8月22日：9：30～10：00）

- ・「はじめに」を「プロローグ」にしてはどうか。
- ・プロローグに教師としての悩みを入れたり、あるべき教師像を入れてはどうか。
- ・プロローグに目指すべき教師像を入れる。
- ・教育の責任はどのように述べるのか。
- ・教師力、組織力など、～力と書いても、学生には分かりにくい。
- ・理念は3つ書き、それを達成するための方法を書くが、理念と方法を対応させて書くと分かりやすい。
- ・理念は3つぐらいで、教師像を経験的な考えを踏まえて書くといいだろう。
- ・教員養成の取り組みの問題点は、学生支援という視点で最後の節として書いた方がいいだろう。
- ・教師像を3つに絞った場合、3つにした理由を明確にする。そうしないと多くの教師像から3つにしたのか分からない。
- ・その理由も一般論や答申の教師像ではなく、自身が体験したケースからこの3つが大切であると述べる方が説得力はある。
- ・教育方法では、ケースメソッドの解説になっている。解説ではなく実際に役立つことを書く。ケースメソッドのメリットを書く。

- ・方法のところの本文に根拠資料を書いておく。
- ・学生を支援している論調で書く。
- ・成果は学生コメントを書くといいが、時期、授業科目を記す。また自分の教育の取組の成果を示すものを書く。効果的であったもの、理念を裏付けるものを強調して載せる。
- ・最後の目標は学生にとって分かりやすく書く。

第3回メンタリング（2013年8月22日：16：30～17：00）

- ・確かな知識に基づいた実践力とは何か。
- ・簡潔にコンパクトに書く。
- ・理念は教えられる学生にどうなって欲しいかを書く。
- ・書きたいことから絞って書くこと。
- ・信頼があれば、なぜよいのか。このエピソードで書いては。
- ・プロローグにケースを入れて書いてはどうか。あるいは3つの理念にそれぞれのケースを入れる書き方もある。
- ・同じ事例でも一般的なものは訴える力が弱い。自分が経験したことを書くのはいいが、自分の経歴は知らない。
- ・理念を3つにしたのはなぜか。その理由・経緯を知りたいと学生は思うし、読み手もたくさんある教師像からなぜ3つなのか分かるエピソードがよい。エピソードも経験に裏付けられたものがない。
- ・方法の欄では理念を達成するために、どのように教育するのかを書く。
- ・重複する文言や内容、あるいはつなぎの文章は不要。
- ・成果でグラフを示すのであれば、どこを学生に見て欲しいのかを書く。成果を強調したいデータを簡潔に示す。平均値に説明を入れる。4段階で4に近いところが平均になっている等。
- ・理念は特に大切にしたい方がよい。
- ・授業評価の数値も「私の授業のここがよいですよ」ということを伝える。
- ・読み手のことを考えて書いていく。読み手が分からないと意味はない。学生に読んでもらいたい、共感してもらわないと意味がない。
- ・ボリュームが多い場合は、添付資料にする。

(4) 学生向けのティーチング・ポートフォリオの作成例

メンターからの支援を受けながら作成したTPは、最初の段階では27頁ほどあった内容が厳選されて、下のようにまとめることができた。

① プロローグ

私がティーチング・ポートフォリオを作成する目的は、担当科目を指導する学生の皆さんに授業の情報提供と私自身の授業に対する思いを伝えるためです。

私は教師を目指す学生の皆さんに、「使命感と情熱」「実践力」「コミュニケーション力」の3つを身に付けて欲しいと考えています。かつて私は荒れた学校に勤めたことがあります。そこで見た教師の姿は、上記3つに欠けるものでした。①非行を繰り返す生徒に対して、体をはって生徒と向き合う気迫に欠けていました。②生徒とのトラブルを避けるような態度でした。③生徒とのコミュニケーションが大切とはいっても、生徒との厳しい対立を避けるような言動でした。そうした教師の態度や指導は、生徒と保護者および地域関係者の信頼を得るものではありませんでした。

荒れた学校に新たに転任してきた教師たちは、学校を建て直すために、勇気をもって生徒の中に入っていったのです。落書き消しをはじめ、生徒と一緒に廃品回収を行い、そのときの収益金は生徒たちのアイデアで破壊された教室のガラス代に使用しました。また学校や生徒のためになると思ったことは、すぐに実行に移しました。そうした教師の取り組みは生徒や保護者の知れるところとなり、次第に学校への信頼感の回復や協力の姿勢に変わっていったのです。こうした事例を目の当たりにすると、学校が信頼を失うことは容易いことですが、逆に関係者からの信頼を得ることは並大抵ではできないことを痛感しました。荒れた学校の教師の姿は、何も特別な姿ではありません。仕事をしていく中で当然に行わなければならないことを棚上げ状態にしていたのです。その付けが回りまわってきたのです。学校が荒れたり学級崩壊が発生すると、一番の被害者は児童生徒なのです。

私はこの体験を踏まえるとともに、3つのことが身に付けられるように授業を進めていきます。この3つは、教師を目指す学生だけに必要なものではありません。社会に出て何かの仕事に就いた場合、どのような職業に就いたとしても、この3つは大切なものです。学生の皆さんが3つの資質能力が修得できるように、自らを鍛え上げていくことを期待しています。

教師になりたいと考えている人の理由は、それぞれ違うでしょう。教員採用試験のための講座や面接練習で、よく耳にする言葉があります。「子どもが好き」「子どもと共に自らが教師として成長したい」などです。多くの皆さんが、共通の思いを抱いていることでしょう。確かに、皆さんの回答は納得できるものばかりです。でも、単に「子どもが好き」という理由だけでは、先生になることは難しいのです。教師になるためには、教職課程を勉強していくとともに、皆さん自身が将来の先生になるために身に付けておかななくてはならないことがたくさんあります。前述した3つは仕事をする上での必修の資質ですが、これ以外にも、皆さん方に、身に付けて欲しいと考えるものがあります。端的に言えば、「笑顔」「元気」「ハキハキ態度」です。先生は子ども相手の仕事ですから、子どもが近寄って来れる雰囲気を持つことが必要です。「しかめ面」や「ぶすつとした顔」では先生はつとまりません。子どもをはじめ保護者や地域の人や同僚の先生とうまく話することができる力も必要です。これらは、日頃生活の中で意識をして努めていけば、自然に身に付くものばかりです。本当に先生になりたいと思うのであれば、こうした態度を日常生活で実践してってください。そのことが

教師になれる近道なのです。

② 教育の責任

教職課程を履修する学生の皆さんには、先生になる、ならないに関わらず、「笑顔」「元気」「ハキハキ態度」の3つを修得することを期待します。

大学の教職課程は、将来、教職に就いて児童生徒を指導する教師を養成する役割を担っています。教師になるには当該校の教職員免許状を取得するだけでなく、教師としての資質能力が試される教師採用試験に合格する必要があります。本学人間発達学科は、教師になるために必要な知識や技能などを専門科目や教職課程科目を通して履修するようになっています。また教師採用試験では、一般教養と教職教養および各教科の専門的知識など、教師に必要な基礎的な知識と技能が問われます。さらに第2次試験では、実践的指導力としての模擬授業、場面指導、実技（水泳・体育・英会話など）、個人面接などが課されるとともに、教師として学校現場で指導ができるかどうかの適性、積極性、意欲、遅しさなどの性向や総合的な人間力などが判定されます。教師になるためには様々な試験をクリアして一定の評価を得なければならないのです。

教師の資質能力に関しては、これまでも中央教育審議会等で何度も取り上げられており、共通してみられる文言としては、「教育者としての使命感」「人間の成長・発達についての深い理解」「児童生徒に対する教育的愛情」「教科等に関する専門的知識と豊かな教養」、そしてこれらを基盤とした「実践的指導力」が教師の普遍的な資質能力とされています。

私は教師の資質能力の基盤である「実践的指導力」の育成を図るため、正課の担当科目および正課外の教師採用試験対策講座等の指導をしていきます。正課の担当科目は表2です。

表2 担当科目一覧

科目名	対象学年	種別・特徴・期間	開講年度・学期	受講者数
特別活動指導法(初等)	2年生	選択・専門・後期	2009～2013年・後期	80～110
特別活動指導法(中等)	2・3年生	選択・専門・後期	2009～2013年・後期	40～70
道徳教育指導法(初等)	3年生	選択・専門・前期	2009～2013年・前期	80～110
道徳教育指導法(中等)	3年生	選択・専門・前期	2010～2013年・前期	80～110
児童・進路指導	4年生	選択・専門・前期	2013年・前期	80～110
生徒・進路指導	4年生	選択・専門・前期	2013年・前期	80～110
教職実践演習	4年生	選択・専門・後期	2013年・後期	100

③ 教育の理念

私は小中学校の先生になるために、教職課程を履修する学生の皆さんに、大学4年間で、3つの力を身に付けて欲しいと願っています。3つを身に付けている先生は、児童生徒や保護者からの信頼感が強いし、たとえ難しい問題に出会っても、それを解決していけるからです。また生き生きとした態度で仕事に取り組んでいる姿が思い浮かびます。

ア 仕事に対する使命感と情熱をもつこと

教師で大切なものは、児童生徒への愛情と仕事に対する意欲です。使命感は勉強面と生活面とで児童生徒を教え導くという強い決意のことです。情熱は児童生徒を指導することに喜びとやり甲斐を持っていることです。そしてこれらの使命感と情熱を基盤として、児童生徒の前では「さすが、先生だ」と尊敬されて目標とされる存在でなくてはなりません。そのためには、教師として絶えず研究と修養に努める必要があります。教科を指導できることは当然ですが、それに勝るとも劣らない人間的魅力がだせるように、努めることが大切です。児童生徒が学校で費やす大半の時間は授業です。ですから授業時間が楽しいと思える指導をしていくとともに、各教科の学力を付ける分かる授業実践を進めることが必要です。児童生徒がその教科を好きになり、学習に真面目に取り組む意欲を持つようになることも重要です。これは、教師の教科指導にかける熱意に関係しています。

イ 人とコミュニケーションがとれること

人が仕事を遂行していく場合、対人関係が必要になってきます。特に教師の場合には、言葉を介して児童生徒と保護者および地域関係者や同僚と望ましい人間関係を樹立していかなければなりません。関係する人たちとのコミュニケーションがうまくできれば、好ましい人間関係が構築されていきます。そういう意味でも、先生という職業には相手とのコミュニケーションがとれる力が求められています。教師にとって必要な資質能力を1つだけあげるとすれば、それはコミュニケーション力です。コミュニケーション力は社会生活をしていく場合に必要不可欠なものです。日頃から身近な人たちに自分の考えや意見を明確に伝えることができることはとても大切です。また自分だけが一方的に喋るのではなく相手が話す内容をしっかりと傾聴できることも必要なことです。コミュニケーションは言葉を通した相手との心のキャッチボールです。相手に投げるボールが速いか遅いか、強いか弱いかで相手からの返球は様々です。大学生活4年間で十分なコミュニケーション力を修得して欲しいと思います。

ウ 教師としての実践的指導力を身に付けること

教師に求められる実践的指導力としては、「専門的知識」と「総合力」があげられます。「専門的知識」は、児童生徒の指導に必要な教科指導など特定領域の能力であり、「総合力」は、教職に関わるものの見方・考え方など、教師の資質全体に関わる能力といえます。

実践的指導力は、直面する教育問題に対する適切な判断ができ、その問題をうまく解決していける実行力のことです。この実践的指導力は、すでに皆さんの頭の中にある情報やこれ

から入ってくる情報を様々な組み合わせ、そこから新しい情報を創り上げていける力と考えることができます。また実践的指導力は、教師に求められるいろいろな問題を解決していける力と言い換えることができます。この実践的指導力は「専門的知識」のように一定の領域に限定されるものではありません。学校で起こった問題に適切に対処ができることです。「専門的知識」は、具体的には整理され記述された正しい知識を身に付けることです。そして必要なときにその知識や情報を引き出せる状態にしておくことが大切です。専門的知識を効率的に身に付ける方法がこれまでの講義形式の授業であるといえます。講義形式の授業は、教師が専門的な知識や情報を学生の皆さんに伝達する一方通行の形態であることが特徴です。

一方、「総合力」は、総合力に関する知識や情報を獲得したとしても、その総合力そのものを有効に使うことはできないのです。この総合力を身に付けるためには、知識や情報を実際の場面で使ってみる機会を数多く持つことが必要です。実際の場面で多くの機会を持てば持つほど、獲得した知識や情報が生きた力になっていくものです。頭で知っているだけではダメなのです。知っていることを実践・実行してみればじめて知っている知識は生きたものになっていくのです。体験的にいえることは、経験を数多く踏むこと、場数を踏むことで知識が有効に働くようになっていくのです。

④ 教育の方法

教師になるためには、専門的知識や指導技術など多くの実践的指導力に関する資質能力が求められます。実際の学校現場では児童生徒についての課題は山積しており、教師には常に課題に挑み課題解決に向けて、様々な工夫と努力を重ねて新しい教育を創造することが求められています。学校に勤務するようになれば、最初に児童生徒との出会いがあり、そこからすぐに指導が始まるし、保護者や地域関係者とのつながりも出てきます。皆さんが先生になると、学校の一員となって活躍することが期待されますし、学校教育を担うなかで様々な問題に出会うのです。その時、解決が困難に思える問題もありますが、先生になったからにはそれに挑み、解決のために新しい教育を創造していかなければなりません。

新しい教育が創造できるためには、教師として直面している問題点を明らかにし、その問題点をどのように把握し、どのような手法を用いて解決するかを考えなければなりません。こうした能力（総合力）は、大学の授業で十分に獲得することができるのです。学生の皆さんに何を期待するのか、どういう力を育てたいのか、どのようにして皆さん方に学ぶ意欲を培うのか、明確な指針があればこれは可能なことです。その指針となるものがケースメソッド授業です。

ア ケース教材を提示する（教師としての実践的指導力を身に付けること）

ケースメソッド授業は、教職に就く学生のための指導方法としては、十分に効果的ですし、学生の皆さんの学びを育てる授業に相応しいものといえます。今後は教師養成に関わる大学

において、小中学校の学校現場のケース教材を取り扱ったケースメソッド授業が進展することを期待しています。

私の授業では、教職課程の学生のために、実際の学校現場で生起している問題をケース教材として使用します。ケース教材に見られる問題を自分でどのように読み、どのような解決策を探るのかを考え、それについて討論して内容を深めることは十分に可能です。多くの教育課題が見られる今日、児童生徒を指導する教師養成に関わる大学の授業は、もっと学校現場の実態を踏まえた教育実践の教育内容・方法を取り入れる必要があると考えます。そのためには、学校現場の具体的事例を扱った内容の授業を進めることが一つの方法です。

イ グループ討論を取り入れる（人とのコミュニケーションがとれること）

教師が学校現場で経験する問題事例に対して、実際にどのように指導や対応をしているのかについて、学生の皆さんは自らが教師の立場で考えることが大切です。自分ならどのようにして問題を解決するのか、その問題の本質はどこにあるのかなど、ケース教材を手掛かりにしながら自ら解決策を探っていくのです。

まさに自ら考え、自ら判断して、自ら行動して自ら課題を解決する教育的実践力が要求されるのです。学校現場の事例を取り上げ、それに対する自分の判断が正しいのか、それとも不十分であり間違っているのか、他の人から学べることはないのかなど、教師の立場で思考訓練をすることは必要なことです。しかもケース教材に関する教師と学生および学生同士の討論を通して、自分の考えや意見を発表し、考えを練り修正を図っていくプロセスは、学生の学びを育てるうえでは不可欠なものです。

そこで、どの学校でも起こり得るようなケース教材を考えました。学生の皆さんには、次週の授業で発表と討論をするために、ケース教材を事前に予習課題として与えるようにしています。皆さんならば、そのケースにどのように対応して、解決策を出していくのかを皆さん自身が考えるためのものです。また学生の皆さんがケース教材の問題点を考えやすいように、3つの設問といくつかの考えてみようの小問を設けました。その設問と考えてみようを中心に事前学習を行い、自学した内容を授業当日までにケースレポートとして提出するようにしています。ケースレポートを作成する過程を通して、皆さんはケース教材について十分に自分の考えを整理しておくことができます。これによってグループ討論やクラス討論が活性化できるようになります。

ウ 授業の振り返りを行う（仕事に対する使命感と情熱をもつこと）

授業の終末の10分間で、取り扱ったケース教材に関する振り返りを行います。振り返りの方法は、授業アンケートを使用します。授業アンケートには、授業目的、グループ討論、クラス討論、学習意欲と満足度に関する17項目について4選択肢（あてはまる・ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない）と3項目（プレゼン・グループ討論・クラス討論）の自由記述欄があります。授業の振り返りを確実に行うことで、教師を目指す学

生の皆さんに教育に対する使命感と情熱を改めて考えさせる貴重な時間になっています。

⑤ 教育の成果

ア ケースメソッド授業の効果

ケースメソッド授業は、ケース教材を用いて討議形式で授業を進めていきます。授業の前半は、各班6名程度のグループ討論のなかで、学生の皆さんは、お互いに意見を述べあって授業を進めていくことができます。学生の皆さんは、グループ内で自分の考えや意見を話すことが要求されます。また自分の考えが補充・深化・充実したものとなるように、他の学生の考えと意見を傾聴することが必要になります。他の学生の皆さんの考えや意見を聞くことで、自分の思考プロセスに不足している部分に気が付き、新たな視点を発見することができるのです。他の学生の発言を受けて、自分の意見がより明確になったり、思考の組み立て方が変わったり、新たな情報を構築したりすることが可能になります。さらに新たに構築された自らの考えや意見を発言することで、別の学生の意見や考えが刺激され、新たな考えや意見の発見があり、各自の考えや意見が集約されることもあります。

このようなケースメソッド授業で討論をするという状態は、お互いの思考プロセスを観察学習している状態として説明することができます。自分の意見を発言することは、勇気を必要としますが、「案ずるより産むが易し」です。発言することで、自分でも気付かなかった自分に出会うことがあります。発言や発表は、自分の思考プロセスを他の学生に言語で表現することです。これはコミュニケーション力を培う視点からも重要なことですし、お互いの思考プロセスを討論することを通じて、学習しあうことが可能になると考えられます。

ケースメソッド授業では、学生の皆さんは討論することで、情報の組み立て方のまずさに気づくことがあります。また自分以外の学生の皆さんが持っている様々な情報の組み立て方に触れることで、自分自身の情報の組み立て方を再構築することができるようになっていくのです。

イ 学生による授業評価結果

2012年に実施した授業評価40項目の平均値をまとめておきます（添付資料1）。

授業評価40項目を「ケースメソッド授業のよさ」「ケースメソッドで付いた力」「ケースメソッド授業は教員養成に有効か」の3カテゴリーで分類して13回分の授業評価の平均点を比較した（表3～5）。評価項目を4選択肢（あてはまる・ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない）にそれぞれ4点～1点を与えて、その平均点を求めた。3カテゴリーの平均点は3点以上であり、学生はケースメソッド授業を肯定的に評価していることが分かる。

表3 ケースメソッド授業のよさの平均値の幅

付いた力	最小値	最大値	平均値	標準偏差
特活（小）	2.87	3.42	3.19	0.13
特活（中）	3.03	3.61	3.32	0.15
道徳（小）	2.71	3.28	3.04	0.16
道徳（中）	2.80	3.20	3.09	0.11

表4 ケースメソッド授業で付いた力

授業のよさ	最小値	最大値	平均値	標準偏差
特活（小）	2.69	3.60	3.19	0.28
特活（中）	2.79	3.73	3.32	0.27
道徳（小）	2.55	3.40	3.04	0.24
道徳（中）	2.68	3.36	3.09	0.24

表5 ケースメソッド授業は教員養成に有効か

教員養成	最小値	最大値	平均値	標準偏差
特活（小）	3.19	3.35	3.30	0.07
特活（中）	3.09	3.55	3.35	0.15
道徳（小）	2.94	3.21	3.05	0.09
道徳（中）	3.00	3.32	3.09	0.12

⑥ 学生による授業評価

ア ケースメソッド授業のよい点（2009年実施の特別活動指導法の自由記述から）

●講義型だと、講師が授業を進めていくので学生側は、講義を聞くだけとなるが、ケースメソッド授業では、課題について自分で予習し、その問題について考え、自分の意見を伝えるという授業を学生側が作り出していくという点があると思う。また小集団討論、全体討論を行うことにより、自分の意見を発表し、伝えるのもそうだが、他の人の意見を聞くことができるので、様々な考えを聞き、自分と考え方が違う人等もいるので、そのような面でこの授業は、講義型にはない有意義な内容である。

●私たちの将来を見据えたケースの内容で、その内容について自分の意見だけでなく他の人の意見も聞くことが出来て良かったと思いました。ケースについての知識や考え方が広がり、教員採用試験だけでなく将来学校現場に立った時に、きっと役立つ授業だったと思います。また、先生の実体験のお話や意見も多く聞くことが出来たので良かったです。教育法規や学習指導要領を復習する機会にもなりました。私たちは、教育に対する考え方や意見をしっかりと持っていますが、初めて皆の考えを聞く場にもなり、レベルの高さも実感できました。私は、今回のケースメソッド授業は学生主体型で、講義型よりも成長し、力の付く授業だと思います。

イ ケースメソッド授業で身に付いた力

●私は、この授業で問題解決能力と対応力が身に付いたと考えます。学校内でのケース事例

を読み、ケースの状態を把握します。次に、ケース内での問題点、疑問点を挙げ、その解決策を探します。自分の意見・考えをまとめ、他の人の考えを参考にしつつ協力して問題の解決に努めます。実際の学校でこういったケースが起こった時も、他教員との協力と連携がとても大切になり、人の考えも受け入れられる人でいなくてはならないと思います。また、多くの事例をこなしたことによって、柔軟な考え方が出来るようになりました。人の考えに飲まれるのではなく、自分の意見の中に取り入れ、生かしていくということは、問題解決の場だけにとどまらず、人生の中で役立つと思います。さらに、様々な問題を知ったことで、働きはじめて、同じような事があった時に動じないはずです。そういった意味で、対応力が身に付いたと思います。

●ケースメソッドでは、思考力・表現力・発言力・積極性が身に付いたと思う。まず「思考力」に関しては、先生から事例を配られ、それについての問題点を明らかにし、改善に向けてどのように取り組むのが良いか考えていくことで、力が付いてきたように感じる。また友だちの発言や先生の発言に対して、より自分の考えを深めていき、自分の考えにつなげていくことが出来た。次に「表現力」に関しては、毎回のレポートで、どのように表記すれば分かりやすいか、皆に伝わるかを考えながら、簡潔に書く、箇条書きで書く、最初に問題点を示すなどといった工夫をしていけるようになった。また発表の時も、どのように話したら皆に聞いてもらえるか、伝わるかなどを考えて発表をしようと思うようになった。三つ目の「発言力」に関しては、討論形式であったために、自分の考えを必ず発表する場が与えられ、発言していくことに少しずつ抵抗がなくなった。最初は小集団で発言するのが、精一杯だったけど、後から全体でも発言していけるようになった。「積極性」に関しては、発言を前よりできるようになったことで、少しだけ自信が付き、積極的に発言や小集団などで、発問をすることが出来た。討論では、内容はめちゃくちゃだったかも知れないけど、この授業のおかげで積極的に発言できたし、少しだけ討論の流れをつくるお手伝いが出来た。またレポートのおかげで前よりパソコンが速く打てるようになったと思う。

ウ 教師教育の準備としてのケースメソッド授業の効果

●まだ教育ボランティアでしか学校現場を知らないの、「こういうケースもあるんだ」と事前に知っておくのは、これから先に同じような経験をした時に、落ち着いた対応ができるのではないかと思います。また、ある程度の心構えを持つ効果があると思います。学校で問題が起こった場合でも、冷静に考える力をケースメソッド授業で身に付けていると思うので、教師教育には必要だと思います。

●先ず、自分の考えをまとめたり、一つの問題にどう対応していけば良いのかという経過を復習したり、整理したりということで、どうすればいいのかということが自然とかつスムーズに行えるようになると思います。実際体験しなくても、こういうことが起きるという想定や、他の人との話し合いで、違った対応も知り、臨機応変の対応が出来るのではないかと思います。

います。つまり、対応力が付く効果があるのではないかと私は思います。それから、人と話し合うこと、連携を取ることがどんなに大切かを改めて知り、それがいかに難しいかを知ることが出来、心構えになると思いました。

⑦ 教育の目標

学生の皆さんの学びを育てる授業をするにあたり、グループ討論を取り入れたケースメソッド授業を進めてきました。その実践の中でケースメソッド授業は、協同学習の考え方と同じであることが分かったのです。協同学習は主体的で自律的な学びの構え、確かに幅広い知識の獲得、仲間と共に課題解決に向かうことができる対人技能、他者を尊重する態度などの資質能力を効果的に身に付けることが可能です。グループ学習をすればそれが協同学習になるのかといえば、必ずしもそうではないのです。協同学習は、学習指導の根底にはいつも協同の考え方を据えるべきであるという「考え方」であり「原理」です。多くの学生の皆さんが教師になり、児童生徒を学習面と生活面で指導していく場合、この協同学習の考え方はとても大切になってくるのです。教師中心の一方向授業では児童生徒はついてこないし、学習指導がうまくできないのです。以上のような意味においてケースメソッド授業では、単に討論をするスキルを学ぶだけではなく、協同学習の考え方・原理を新たに修得して欲しいと考えています。協同学習には、「自分の学びに対する責任」と「グループの仲間一人ひとりの学びに対する責任」があるのです。このグループ討論は、自分の考えを述べ、相手の考えを傾聴してお互いに学び合うことができる貴重な時間なのです。私は授業を研究フィールドと考え、ケースメソッド授業をすすめながら、学生の主体的な学びについて教育実践の深まりを追究していきたいと考えています。

4. 学生へのTP提示とアンケート結果のまとめ

平成25年後期授業科目「特別活動指導法（初等）」の第1回目授業で、授業に関する内容を説明するとともに、授業の終わりに、下記の「特活の授業説明のアンケート」を行った。

またTPに関する学生への説明は、「1 プロローグ」、「TPとは何か」、「2 教育の責任」、「3 教育の理念」、「4 授業の方法」、「5 教育の成果」、「6 今後の目標」についてのプレゼンシートを提示して行った。同様に、アンケート結果は下記に「TPが理解できましたか」、「教育の責任が理解できましたか」、「教育の理念が理解できましたか」、「教育の方法が理解できましたか」、「教育の成果が理解できましたか」、「今後の教育の目標が理解できましたか」についてプレゼンシートにまとめてみた。

特活の授業説明のアンケート 氏名()

問1 あなたの性格は？(○はいくつでも)

- ①明るい ②のんびり ③気分や ④気配り ⑤ユーモア ⑥クール
⑦慎重 ⑧社交的 ⑨個性的 ⑩目立ちたがり

問2 ティーチング・ポートフォリオ (TP) が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問3 「教育の責任」が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問4 「教育の理念」が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問5 「教育の方法」が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問6 「教育の成果」が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問7 「今後の教育の目標」が理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問8 あなたは授業説明のプレゼンが理解できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問9 授業説明を聞いて、あなたのこれまでの学習が変わると思いますか？

- ①変わる ②やや変わる ③あまり変わらない ④変わらない

問10 あなたはケースメソッド授業に興味関心がありますか？

- ①ある ②ややある ③あまりない ④ない

問 11 あなたは、下の授業テーマで、どれに興味関心がありますか？（○はいくつでも）

- ①学級担任になったA子の不安
- ②全体計画は絵に描いた餅なのだろうか？
- ③基本的生活習慣とは何かを考える
- ④学級崩壊の噂が出始めた担任と児童との関係を考える
- ⑤人権教育について考える
- ⑥特別活動の指導案作成と書き方を考える
- ⑦グループ分けの班で指導案を作成する
- ⑧各班で作成した指導案を発表する
- ⑨家庭や地域との連携について考える
- ⑩昼休みの怪我について教師はどこまで責任を負うのか
- ⑪学級における不登校を考える
- ⑫特別活動の評価を考える
- ⑬国旗掲揚と国歌斉唱について考える

問 13 全体として、ケースメソッド授業のオリエンテーションは満足できましたか？

- ①できた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

問 14 オリエンテーションの感想を書いてください。

【TP説明のプレゼンシート】

ティーチング・ポートフォリオ(TP)とは何か
●教員が、自分の教育活動を振り返り、
自分の言葉で書き、様々な根拠資料
によって、これらの記録を裏付けた教
育業績の記録。

- ①教育の責任(何をやっているのか)
- ②教育の理念(なぜやっているのか)
- ③教育の方法(どのようにやっているのか)
- ④教育の成果(どうだったか)
- ⑤今後の目標(これからどうするか)

1. プロローグ

- 「使命感・情熱」、「実践力」
「コミュニケーション力」の
3つの資質能力。
- 荒れた中学校の教師の姿。
- 「笑顔」、「元気」、「ハキハキ
態度」も大切。

2. 教育の責任

【教師の普遍的な資質能力】

- 「教育者としての使命感」
- 「人間の成長・発達についての深い理解」
- 「児童生徒に対する教育的愛情」
- 「教科等に関する専門的知識と豊かな教養」
- 上記を基盤とした「実践的指導力」

3. 教育の理念

- (1) 仕事に対する使命感と情熱をもつこと
- (2) 人とコミュニケーションがとれること
- (3) 教師としての実践的指導力を身に付けること
- 「専門的知識」は、児童生徒の指導に必要な教科指導など特定領域の能力。
- 「総合力」は、教職に関わる物の見方・考え方など、教師の資質全体(人間力・人間的魅力)に関わる能力。

4. 教育の方法

- ① ケース教材を提示する(教師としての実践的指導力を身に付けること)
- ② グループ討論を取り入れる(人とのコミュニケーションがとれること)
- ③ 授業の振り返りを行う(仕事に対する使命感と情熱をもつこと)

5. 教育の成果

【ケースメソッド授業で付いた力】

- 自ら課題に取り組み、考えてまとめる力
- 積極的な発言と相手への共感力、傾聴力
- 思考力、表現力、発言力、積極性、自信
- レポートのまとめ方、整理力、書き方
- 調べ学習の仕方、パソコン操作力、プレゼン力
- 文章を理解し、分析し、考える力、読解力
- 違う視野で物事を見る、討論力、推察力

6. 今後の目標

- 協同学習の「自分の学びに対する責任」と「グループの仲間一人ひとりの学びに対する責任」を持たせていく。
- ケースメソッド授業をすすめながら、学生の主体的な学びについて教育実践の深まりを追究していく。

【アンケート結果のプレゼンシート】



5. 考察と課題

TPは教育業績評価を対外的に提示するものであり、提示対象者は教員か学生かの二通りである。一つは大学の専任教員採用や学内昇任に関わる場合に大学管理運営者に提示するものである。もう一つは、学生に担当する授業科目にける教員の思いと責任を積極的に提示する場合である。いずれの場合でもその記載項目内容には大差はないが、学生への提示の場合には学生が読みやすい文章記述が必要である。学生が記載内容を読む場合に煩わしく思うような書き方は避けた方がよい。折角意気込んでTPを作成しても学生が読んでくれないと、TPの役割は半減してしまう。内容は平易で分かりやすく書くことが大切である。

またTPを作成して初めて理解できたことは、自らの教育姿勢が問われるということである。TPを作成する過程では、メンターから「何故そうするのですか」、「それはどういう理由からですか」など「何故ですか」という問いかけが頻繁に投げかけられた。質問の回答に窮することもあった。それは筆者自身がその質問に対して、相手に分かりやすい言葉を使って説明することが十分でないことを意味するものであった。特に教育の理念や教育の目的などを学生が読んだり見たりしてすぐに分かる内容で記載する難しさが分かった。メンターとの問答は内省や省察の契機を与えてくれた。TP作成は自身の教育について内省がしっかりできる機会であり、教育に対する理念や使命感・責任感を感じ取る貴重な体験であった。

TPを学生に説明した後のアンケートの回答結果を見ると、「理解できた」と「やや理解できた」を肯定的評価とし、「あまり理解できなかった」と「理解できなかった」を否定的評価と考えると、前述のアンケート結果のプレゼンシートから分かるように、大半の学生がTPの説明について肯定的評価を示していた。こうしたTPを学生に説明することは授業に意欲を持って取り組む学生を育てていく際に、教員側の準備として必要なものであるといえよう。これからの教員は自らが担当する授業にかける思いを、TPという具体的に文書化した教育業績評価を提示していくことが求められてくるのではないだろうか。この教育業績評価を通して授業を行う教員と授業を受ける学生が共に教育について真摯に取り組むことができいくのではないだろうか。今後の課題としてあげられることは次のことである。TPは作成すればそれで完成して終わるものではない。より洗練されたTP作成を継続して考究していくことが必要である。そして新たなTP作成を今後も続けながら、いずれの時期かにはメンターとしてTP作成に関われるような力量を培っていきたいと考えている。

注

- (1) ピーター・セルディン著（監訳者：川口昭彦・栗田佳代子）『大学教育を変える教育業績記録－ティーチング・ポートフォリオの作成の手引－』玉川大学出版部 2011年
- (2) 皆本晃弥著『－文書例付－大学教員の教育者としての業績記録 ティーチング・ポートフォリオ導入・活用ガイド』近代科学社 2012年
- (3) ピーター・セルディン 前掲
- (4) 大学評価・学位授与機構著「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題」2008年
- (5) ピーター・セルディン 前掲
- (6) 大阪府立大学高専TP研究会編著者『実践ティーチング・ポートフォリオ スターターブック』NTS 2011年

Information about creating a teaching portfolio

Tsukasa KAWANO

Department of Education and psychology, Faculty of
Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishiku, Kitakyushushi Fukuoka 807-8586 Japan

Abstract

Currently, assessment of personnel recruitment and faculty, is to those around the research achievements of faculty itself. However, the teacher evaluation, there is opinion that should be added evaluation of teachers themselves involved in education on the one hand. In the future, axis foot would not be going to move to the point of view of performance evaluation and education teacher evaluation. Interest because he has come to be held and changes in the social environment surrounding the University One of the reasons, the diversification of students to enroll in college. Therefore, we decided to think about teaching portfolios create their own opportunity in that it has joined the workshop of teaching portfolio.